

議 事 録

会議名 第18回佐賀県総合教育会議
開催日時 令和2年11月24日(火曜日)15時～16時
開催場所 佐賀県庁新館4階 プレゼンテーションルーム
出席者 山口知事、落合教育長、牟田委員、小林委員、加藤委員、飯盛(清)委員、
飯盛(裕)委員
(知事部局)小林副知事、進政策部長
(総合教育会議事務局)林政策総括監、他
議題 (1)魅力・特色ある学校づくりについて

議事録

1 開会

(林政策総括監)

これより第18回佐賀県総合教育会議を開催いたします。

本日は、知事、教育長、教育委員の皆様と小林副知事と政策部長に御出席いただいております。
まず知事から御挨拶をお願いいたします。

2 あいさつ

(山口知事)

新型コロナウイルスに関しましては、佐賀方式ということで徹底的に検査を周辺部までして、それ以上の感染が広がらないところまで拮めて、もし陽性が出たら必ずホテルか病院に入っていただくという佐賀方式をずっとやっております。それでイベント系も、佐賀さいこうフェスとか、昨日は伝承芸能祭もそのまま1,000人以上で普通にやって開催できました。これからも、コロナ感染者が出るといいます。これだけ都心部に人がいて、行き来があるわけで、その出た度々でしっかりと封じ込めを図っていききたいと思います。子どもたちにうつることも、今家庭内感染が非常にうつりやすくなっていますので、うつっても一つ一つ動揺せずしっかりと対応して、それはそれで止めていくということ、そして学校も学校の中で今やっていただけるようなことを、しっかりやっていただくということだと思います。今後とも、教育委員会と連携してやっていきたいと思っています。

今日の課題ですが、こういうコロナ後の時代を見据えた上で、骨太の子どもを作っていくためには、どうすればいいかっていうことをずっと考え続けていたわけですが、私は中学も高校も私立高校に行きました。今でも母校は同じ先生がいて、部活などもいまだに縦の関係が続き、そして校風も「ホームスピリット」ということで変わらずそれを伝統にしながら、それを生きる支えにもしながら、母校愛を持ちながら、私は自分の母校に行って良かったなと心から思っております。多分、国立大学なんかは実際それぞれですね、北大は北大の伝統があって、京都大学は京都大学の伝統があって、佐大は佐大の伝統があってというところで、それぞれ校風というのをしっかり持った上で、みんな誇りを持って生きてるんだろうというふう思うわけです。その時に、どうしてもやっぱり県立高校というところで考えて、先生の異動が多いし、「質実剛健」という校風が非常に多いし、何となくその学校というもののアイデンティティというか、僕らはこういう学校なんだという誇りみたいなものが揃っているのかなと、私もいろいろ取材したところ、県庁にもいろんな県立高校の卒業生がいるの

で、「当時どういう校訓でどういう学校だった？」って聞くんですけども、「分からない」という答えが多く非常に寂しいことだなと思います。やはり、鹿城(ろくじょう：鹿島高校)は鹿城の、鶴城(かくじょう：唐津東高校)は鶴城の、黄城(おうじょう：小城高校)は黄城の誇りがあって、栄城(えいじょう：佐賀西高校)は栄城と。特にユニホームに栄城と書いてあるのは、私たちの栄城だぞという打ち出しをしたかったのではないかな。佐賀西高校と書いてないからね。そういう風に思ったりするので、何か本当にその学校学校の個性、もちろん商業高校、工業高校すばらしい個性を持っている。私も何回か行かせていただきまして思っているので、そういう商業工業ももちろん、強いアイデンティティをもってやっていただいたらいいのかなというふうに、私たちだけの唯一無二。(唯一無二のシールを配られる)私も初めて配りました。これを思いついたのが三養基高校の100年祭に出てくれと言われたときに、やっぱり普通どおりにしないで多分三養基高校らしいことを言いたいなと思った時に「唯一無二、三養基」と習字を朝書いて、それを示してね。質実剛健もいいけどそれも大事にしながら、やっぱりこう「唯一無二、三養基」これ一二三とあるんですね。ということを申し上げたけど、考えてみれば三養基高校だけじゃなくて、いやみんなそうじゃない。やっぱり私たちは、ここにしかない。私はここで育って、私たちが作り上げたんだっていう、何かそういう世界を作って行っていただけないだろうかという問題意識でありまして、それは何でそうならないのかなって思った時に、そこはむしろ皆さんが詳しいのかもしれない。教育委員会株式会社という中で、品質管理をしているからかもしれないし、国立大学はもう独法としてそれぞれの道を歩み、同じ国立大学だったのに、それぞれの道を歩んで独立採算で自分たちの中でやりなさいとお金はもらってるけど、というふうになっていることを考えると、佐賀県はそういう方向で考えて、もともと学制という国民皆教育を一旦佐賀県人がスタートして、それまでは一定の人しか江戸時代は教育を受けられなかったのを、明治の初期に佐賀藩が言い出して、前文科省がお金を出さずに通知だけで、みんな寺子屋とか勝手に木を使って自分たちで学校を作りなさいと、教えるべきことはこれですって、みんなお金をくれなかったってところ、日本中の市町村が、当時は70,000くらいあったけど、大変なことになって、それでもみんなの自治の気持ちの中で学校を作っていった。そういうふうなことを黎明を告げていったのが、大木喬任やらの佐賀県人なのでそういうことを考えると、私たちの中でそういった唯一無二の考え方ということで、学校教育をやっていくのは素晴らしいことだと思いますので、落合教育長におかれましては、教育委員会の皆様方と、私がそこは問題意識は言えても、皆様方がどう考えるのかとても大事なことなので、ぜひ皆様方と議論しながら、今日は話が出来たらなと思っております、よろしく申し上げます。

(林政策総括監)

知事ありがとうございました。本日のテーマは「魅力・特色ある学校づくりについて」で、骨太の子供を育てていくために、今、知事から御説明がありました、学校のアイデンティティをどうしていくのか。唯一無二の存在に学校をしていくには、どうしたらいいのか。ということについて意見交換をお願いいたします。意見交換の内容につきましては、今後の教育委員会での取り組みに活かしていただければと思っております。

では、教育長から資料の御説明をお願いいたします。

(落合教育長)

ありがとうございます。ただいま知事のほうから、唯一無二の学校作りが大事なんじゃないかと御提言をいただきました。私は教育長になって約1年ちょっとになりますけど、100周年とか120周年

とか何校か出させていただいて、それぞれの学校で伝統とか誇りとかいうのはやっぱりそういう式典の場面では結構感じるなあと思うんですけども、日頃学校の中でそういうものについて徹底的に磨き上げて、そしてまたそれを発信し対外的にも自分たちの生徒なり関係者に発信していったらって、まだまだそこまでないんじゃないのかなと、これから先の少子化時代を見据えて県立学校がしっかりと生徒たちにとって、やりがいのある場所にしていくためには、活気のある場所にしていくためには、その辺もっと磨き上げていく必要があるんじゃないかなと問題意識を私も持っているところです。そういった中で、今日の議論の中で議論の材料をまず説明したいと思います。次のページをお願いします。

知事のほうから中学生の高校進学受験の県外流出という問題提起を、特に野球、先日は野球でしたけど、いろんな場面で人材の県外流出については知事から常に問題提起いただいているところです。学生に関していくと中学から高校に進む段階の、県外の流出流入の状況をちょっとグラフにしてみました。資料3ページの赤色の実線が流入で入ってくる。点線が出ていくんですけど、意外だったのは意外と拮抗してる。どっちかという流出がもっと激しいのかなと思ったんですけど、意外と出入りありますけど均衡してるなっていうのがありますけどももっとも流出を抑えたいし、流入を上げたいっていうのは、このぐらいで言えるのはいずれも右肩上がり、県境というのは意外と流動化してるんだなあ、人の行き来が増えてるんだってことがこのグラフでわかると思います。次をお願いします。それを実数ベースになおしたとこなんですけど、流入が左側ですね、一番下の令和2年でいくと437人、流出が470人で33人のマイナスです。出ていくほうは私立に出ていってます。入ってくるのは私立ももちろん340人頑張ってもらってますけど、県立も意外と100人ぐらい来てるというのが分かると思います。次をお願いします。県立にどういうことで来てるかというのをまとめたのが上なんですけど、県境指定中学校からの進学が、例えば福岡県の小郡から鳥栖工業とかですね、あるいは有田工業のほうに、長崎の波佐見からというところから来てるのは4割ぐらいあります。それとあと一番下の部活ですね。それから佐賀工業ラグビーだったり、鳥栖高校もいろいろありますけど、佐賀東はサッカーとかあります。そういうことで流入が多い高校ということで、左側の下のほうに上げてあります。県内から県外に出ていってる人たちの中学生のその理由というのを聞くと、そこに書いてあるように、そこに特色ある学科コースがあるとか、あるいは通学しやすい、鳥栖あたりは割と通学しやすいので、そういったインセンティブが結構、奨学金だったり部活だったら特待生とか、そういうのも結構聞いて県外を選んでもという実態があるようです。そういう中で、我々、佐賀県の特色を打ち出した学校作りを今後もやりたいと思うんですけど、次のページをお願いします。

現状、特色といったときにどういう学校があるかと若干御紹介しますと、一つは有田工業がセラミックとかデザインとか全国的にも非常に珍しい。また神埼清明は、新体操の男子ももちろん全国レベルですけど、介護技術コンテストで全国1位、去年知事のほうにも報告に来てくれましたけど、介護での全国レベルを持っています。あと左下の太良・巖木はこれ全県枠ということで不登校とか発達障害がある子、あるいは中退した生徒を受け入れるなどそういう特色を打ち出しています。また佐賀北高校は、皆さんご存知のように芸術科もありますし、部活動でも文武両道でということで、こういう一例ですけど、こういう特色のもっともほかの学校のいろんな特色もありますし、それをもっと磨き上げて打ち出していく必要があるのではないかな。あるいは、今後のことを見据えて新たな魅力なり特色をつくり出すっていう観点も必要んじゃないかなというふうに思っています。次です。

これは今後の取組の中で一つ、地域と連携をもっと強める必要があるんじゃないかなっていう問題意識を持ってまして、県立学校は県内を東西に二つに割った学区でやって、かなり以前と比べると広域化しています。以前は自分の町の学校があってそこに通うって感じだったんだけど、今はもう県内

二つにしか分かれてない状況なので、地域との結びつきというのが希薄になってるところがあって、そこを改めて見直す地域の自治体とのしっかり連携した学校作りが、必要になってくるんじゃないかなという問題意識を持っていて、これは手段の一つではあるんですけど、ここはもっともっと取り組んでいく必要があるんじゃないかなというふうに思ってます。次お願いします。ということで我々としても、唯一無二は、知事から三養基高校にプレゼントされたものだと思いますけども、学校一般の考え方としてですね、唯一無二の他にない特色を打ち出した誇り高きみんなが、生徒も先生も保護者も地域の人もみんなが、その学校を自慢できるように、そういう学校にしていきたい。その結果としてかもしれないんですけど、県内だけじゃなく、全国に打って出れるような学校にしていきたい。佐賀県が進める流出を止めて、県外から人を呼び込んだ学校の場合でもそういうのを実現していきたい。そういうことを今後打ち出していきたいというのが私の気持ちです。

(山口知事)

県立高校で質実剛健とかが校訓だって言われるんですけど、まず「誰が決めたのか」ということと、「途中で誰かが別のことを言い出ししたりしたことがあるのか」ということを教えてください。

(落合教育長)

学校学校によって違うと思うんですけど、これまで行った 100 周年、120 周年で聞いた限りだと、かなり早い段階でそういうのを打ち出して、校長室に立派な書が掲げてあったりしますが。

(山口知事)

だから、それは動かないもの。途中で学校の中で議論して、こうしたいということが利かないものと思っていいですか。要は明治の人が決めたら二度と動かない。

(飯盛(清)委員)

多分、同窓会とかでそこら辺りトップの方々の了解とか、その辺も必要なんじゃないでしょうか。予想ですけど。

(落合教育長)

青木副教育長いかがですか。学校現場の雰囲気として。

(青木副教育長)

質実剛健とは、私の母校にもずっとありましたので、もうかれこれ 40 年近く変わってはないんですが、一時期校長先生がちょっと違う視点で入られた時に、そこにちょっと付け加えたりされた時がありました。また元に戻るとというのが現状です。そこが、特にその 90 周年とか 100 周年とかその周年に合わせて学校を盛り上げようということで、今後の方向性をみんなで検討しようというなかで、方針で追加される時はあります。

(山口知事)

もともとすぐく創始者というか、誰かが言ったことをずっと守ってきた伝統という、これを私は尊重していいと思う。ただ言いたかったのは、ずっと自分たちの学校をどうしようかという議論もなく、それぞれであっていいけど、別に質実剛健はこれからも多くあっていいんだけど、自分たちの中で

ういう学校にしようかという議論が出来ない雰囲気がないのかなと心配になってしまう。だから何となく校長先生が5年やっても、それをずっとレールを引かれたまま、牟田委員が言ってる、校則と一緒に一旦決めてしまうともう。

(落合教育長)

いずれにしても、各学校が必死になって考えて、教育委員会が全部一律に何か言うのでなくて各学校が必死で考えなきゃいけないと思うんですよ。必死で考える中で、今までのものが邪魔になる場合もありますよね、そういうのは恐れずに場合によっては学校によっては恐れずに、それを大事にすることがその特色になっていますし、それぞれじゃないかなと思います。

(山口知事)

進政策部長は国立の高校だけど、習った先生は残っているの。

(進政策部長)

います。

(山口知事)

いるよね。いると同じ校風できちゃう。佐賀東が佐賀西とか佐賀北に異動しちゃうと、例えば、何かA校B校C校みたいな、それこそ東南西北という感じになりやすすくない。

(落合教育長)

この間、県外のとある私立が非常にピンチだったところが復活した、その話を聞くと、やっぱり私立ですから異動が効かないので、「自分の学校を何とかせないかん」ともう必死なんです。そういうところは、じゃあ公立はどうかっていうと、やっぱり異動があるし、そういうとこ自分のこととしてそういう危機感を持つというのは難しいのかなと。現状はわかりませんが。

(山口知事)

佐賀県の教職の人って、自分は県立高校の教員であって何とか高校の教員とは思ってないの。

(落合教育長)

どう思います。青木副教育長。

(青木副教育長)

県立高校の教員で、どっかの母校はあるという感じですので。

(山口知事)

だからそうね。だから生徒との結びつきはもちろん今でもあるんだろうけど、恩師という形で、ただ何かこう、それこそ「三養基高校の先生」というふうにはならんわけよね。

(青木副教育長)

そうですね。ただ先生の中には、ずっといらっしゃる先生もいらっしゃいます。

(山口知事)

そうすると、やっぱりずっと佐賀工業にいる先生が、佐賀工業の何とか先生となるわけで、それはそれでその後の教員も、生きていく元気がでるといえるか。あの学校に行ったら「あの先生」って、私立みたい。

(落合教育長)

学校の魅力の中核になるような先生の存在が重要なポイントじゃないかと思います。「あの学校の、あの先生」、「あの部活の、あの先生」。

(進政策部長)

特長をもしそうやって決めていくのであれば、それに沿った先生は、全員ずっと同じ学校にいると言わないですが、ちょっと長く居てもらおうとか。

(落合教育長)

人事戦略の基本のところを、今までの方針だと何年で異動というふうに。

(進政策部長)

一律で機械的に回していた。

(落合教育長)

原則として置いていたので、その原則を若干見直していくということになると思います。

(山口知事)

アメリカなんかはどう。

(飯盛(裕)委員)

実は、佐賀市がグレンズフォールズと交流して、昭栄中学校がホストファミリーだったんですけど、先生たちがホストファミリーするところがないということで、うちの実家でホストファミリーしたんですが、先生たち2人といろいろ話をする中で、アメリカはどうなのか聞いたら、アメリカはその学校にずっといて自分が転勤をしたければ、いろいろ探していい環境と給料がいいところに転勤をするそうなんです。だから、無理やりというか人事異動という概念がアメリカにはない。多分、日本独特のような気がするんですね。普通の企業でもあんまり人事異動とは、あんまり聞かないですね。

(山口知事)

だから極めて特殊な環境に県立高校の先生はいると、私はいつも見てて思うんだけど、どこに就職したのかなと。

(飯盛(裕)委員)

終身雇用でいろんなことを経験したほうがいいから、人事異動をするような制度が日本にはあったのかもしれませんが。海外だと、自分がお給料アップしたかったら別のところに就職したりします。

(山口知事)

そうですね。もともとその学校だって、そこにかかる資金ですらみんなの税金で、ふんだんにある学校と税金が集まらない学校は、貧富の差が激しくて、そこで雇われる先生っていう感じになってる。地方自治のシステム自体、ただある部分うちの国はフラットというか標準仕様を作り込んで、そもそもはあるんで、その中でどうするかっていうこと。

(牟田委員)

佐賀県だけが特異なわけじゃないんでしょ。全部動くわけでしょ。これね、知事の言うことだとその通りだと思うんですけど。現実にしようとした場合に、ある先生はどっか10年ぐらいいて、その学校の特色を出せる、そうすると他の学校の父兄は羨ましいなとかつい思っちゃうから、やっぱ転勤さしてくれとかいろいろなってくるわけじゃないですか、だからこっちへみえると思うけど、現実問題として配置というか人事異動がなかなか厳しいだろうなとは思いますが。難しくないのか分からないけど。後、今もね校長は大概2年ぐらいで、やっぱり年齢というところで変わるじゃないですか。多分校長というのは、会社の社長として決めれば校風だって動くんじゃないのかな。いろいろと言えるはずなんですけど、2年で変わっていくんだから、もうやりようがないんじゃないかなと思います。

(山口知事)

そう、ちょっと短いんじゃないかなと思っているけど、そのタームがね。それが2年じゃなくて5年だと腰を据えてやるんだらうけれども、2年だとあれ、あの校長先生またライバル校に行っちゃったとなるから。

(牟田委員)

私、戦後生まれだけど、戦後の教育が割と教育の機会均等みたいなのを打ち出してるから、どうしても県立とか国公立ではやっぱり均等な教育を受けられなきゃいけない。その先生に逆に個性があっちゃいけないって、2、3年ごとにぐるぐるぐるぐる動かして、全体が均等になるんじゃないかみたいな発想があったんじゃないのかなと思うんですね。

(山口知事)

あったと思う。だから金太郎飴みたいに同じような教育をやるような環境にあったと思うし、あんまり格差をつけてないんだらう。

(牟田委員)

本当に知事が言うことは、まさにその通りなんですけど、校長先生は変わる、先生が変わる、どこまで実現できるんでしょうか。

(山口知事)

その問題になると、教育委員会の中で話し合っていたくことに。

(牟田委員)

小中だけどやっぱり、飯盛(清)委員に聞くのが一番かな。実態を知ってらっしゃるから。

(飯盛(清)委員)

学校長に求められるものっていうのを考えた時ですね、今も出ましたけど、まず、日本国憲法があって、その下に、教育基本法以下教育関連の法律があり、文科省、県教委の方針に則った中じゃないと動けないという縛りがありますよね。それともう一つは、地元の今までの歴史と伝統を継承しないといけない。そしたら新しい時代の要請に応じる部分、それを職員に話をして納得させてその気にさせて、気持ちよく同じ方向を目指して頑張らせることができると、うまくいくような気がします。気持ちよくなってということでは難しいですね。1人が30人40人の職員に言ってもなかなか浸透しないから、やっぱり中間で活躍してくれるそれを伝えてくれる人たちの役割が重要である「ミドルリーダー」というんですか、校長がやっぱりその人たちの意見を吸い上げて、合わせて自分の意見だけじゃなくて、そういったことがテクニックかなという気もしています。歴史と伝統がしっかりしている。さっき知事はいろいろ尋ねたけど「分からない」。自分の学校高校の伝統なんだと言われても、分からないという人が大部分じゃないかなという気がしますけど、今日私は私立ですけど、ある先生を尋ねてみたら唐津東高校の校訓をしっかりと言いました。そういった学校は、新しいことを入れてもやりやすいんじゃないかなと、しっかりしてる部分があるからっていうふうに言われて、最近この統合した学校とか、そこら辺りが、これからそういったことを入れていくとなると難しいんじゃないかなあという話をしていました。やっぱり人事異動の弊害というかですね、あるんじゃないかなと。今も多分教職員課から出される人事異動の方針、教員にとって人事異動は研修の場であると。特に若い人たちは、最初に入った学校から違うところに入ると全然こういろんな違うやり方があったりということで、どんどん自分の器が広がっていきますよ。だから、自分が成長する良い機会と思って、人事異動に乗かっていきたいと思いますよとか、そういった方針も多分まだなされていると思いますし、実際そういったところもあります。ただ、やっぱり校長をさっきおっしゃってたように、2年3年それから核になる教員もですね、5年6年が限度ですかね今、それが入れ替わっていくと、なかなか変えようと思って出来ない。それが私学とちょっと違うかなというふうな気がしています。以上です。

(山口知事)

そうか、若い人は確かにそういうところもね。もちろん県庁でもそうだよ。最初には定期的に異動を、それ自身が自分の経験を積むことになるっていうことだから。ただ研修もそうだけど、ある程度になってくると自分の専門領域だったりあって。

(落合教育長)

ある程度ホームグラウンドがはっきりしてるというのと、経験の幅を広げていく、両立していきなきゃいけないと思うんですよ。今はホームグラウンドを「あなたのホームグラウンドがここなんですよ」とはないんです。平等な観点に異動してるみたいです。だから、そこをもう少し明確にしてやったほうが、自分の学校の何とかというふうにはやりやすいんじゃないのかなと思います。完全に一つの学校でしか生きていけないということにはならないと思いますけど。

(山口知事)

それは若いうちは確かにそうやろうね。経験するということもそうだし、何か小中はある程度どこの小中でも同じ品質でなくてはならないと言いましょか、高校は義務教育じゃないから、やっぱり自分がここに入ったんだっていうところに、強い気持ちがあってもおかしくない。

(牟田委員)

別の視点で言っているのでしょうか。ご存知のように、私、伊万里が好きで伊万里高校で伊万里高校なんて本当に特色ない、怒られるかな。普通科なんですけど、私も伊万里高校好きです。今聞いてて考えたんだけど、何でかと思ったら伊万里ってところが好きで、そこで過ごした高校生の3年間はきっといい思い出なんですよね。ただちょっと話が変わるけど、知事が愉快で「佐賀さいこうで誇りに思うということ」にも通じていくんじゃないかと思うんですよね。「子育てし大県」でもいいし、佐賀を好きになって自分の郷土を好きになれば、その時過ごした小中高と好きなんじゃないかと思うけど、駄目でしょうか。

(山口知事)

それはもちろん。ただ、これから求められる人材は、画一的なサラリーマンじゃないから、そこにやっぱりある程度個性を埋め込んでいったほうが、きっと教育上もいいだろうということも含めたことです。

(小林副知事)

多分二つに分けて考えてた方がいいのかなと、ちょっと思ったんですけど。

一つは、例えば有田工業なんか一番わかりやすいんですけど、セラミックはここでしか出来ないとか。教育内容が凄く特色があるという話で、それだと人事もセットで場合によっては考えないといけない部分が出てくるのかなと。

もう一つは、牟田委員がおっしゃったような、地域と密着してたり校風であったり、もう少しむしろ伝統であったり雰囲気であったり、それは流れの積み重ねで出来ていて、そちらの部分は必ずしも教員が人事とリンクしてなくても、むしろ例えば、そのOBとかいる先輩と後輩が伝えていたり、校長先生が変わっても文字化されてたり、それが分かるような形になっていけば、うちの学校はこういう伝統だから、すると質実剛健が良いか悪いか別として、例えば私なんか私学の大学で、ものすごくそういうのが強い大学で、みんなその大学が大好きな人達の集まりなんですけど、やっぱり別に教員がどうか、大学なのでちょっと違うかもしれないですけど、OB がすごく「うちの大学はいいよね」「こういうところがいいよね」というそれを引き継いでって、それが拡大していったようなところもあるので、何かその二つは分けて考えてたほうがいいのかなってちょっと思いました。

(加藤委員)

私も有田工業とか神埼清明の介護福祉科とかは、それぞれの専門の先生がいらっしやいますよね。なのでセラミック科とかの先生は異動しないし、あと介護の先生も介護のあるところに回られるということなんですけど、そういう特色のある学校は、本当に先生たちが制限なく自由にいろんなアイデアでやっていただけたらなと思います。公立というのは、いろんな制限のもとにやってらっしゃるんで、うちに介護の先生とかおられて「こんなことしたい」とかおっしゃるんですけど、なかなかやっぱり法律の中にいると制限されると言われるんですよね。やっぱり、こういう実績も出してらっしゃるところは、もう本当に自由に伸び伸びとしていただくと、もっともっと特色のある学校になるんじゃないかなというふうに思います。

(小林委員)

今、先生方の話があったんですけど、子どもたち自身もその学校に行った時に、それぞれ目指す

ところがあって入った自分が存在して、認められる場所である。その校風とかよりも、入った時に実感として自分が存在して、仲間からも先生たちからも受け止めてもらう経験がどの子にもあることが大事かなと思います。ちょっと中退とか不登校の子もかなり数が多かったりするんですけど、この場所に居たい、居場所というか、ある思いを言ってもらえるように、先生方もいろんなタイプの先生たちがいて、どんな時も手を差し伸べてくれるとか、自分がやりたいこと、入試のために「これは役に立つから」、「将来役に立つから」とか、「入社のためになるから」ということで学ぶことを与えられる場ではなくて、子供自身が興味を持ったことをとことん、今探求という時間がありますけども、そういうことができるとか、それを学校だけじゃなくて地域にもフィールドを出して、今、地域と共に魅力づくりをやってますけど、そういうことをすることで本当に自分がそこに居てもいいって思ってもらえる、そういう実感が持てるような学校になったらいいなと。すいません。ぼわっとしたイメージしかないですが、そんなことを考えています。

(牟田委員)

唯一無二の高校の特色は、人間の個性みたいなものであって、個性を作れって言われたって、個性とは成長してきた過程でできているんだろうから無理で、我々がもしするとしたら、唯一無二の学校になれって言うバルーンさえ打ち上げれば、それに対して各校のそういう風にならなきゃいけないんだなって言って、自らやっていかなきゃいけないような気がするんですけどね。例えば、ずっと生きてきた感じで、牟田はこういう人なんだなっていうのと一緒に、だからまさに伝統だと思いうんて言いかえると、今後うちの県立高校皆ね今はもともとあってもいいし、これからはもうますます「唯一無二の個性を持った高校になっていこうよ」。

(山口知事)

「なっているんだよ」。

(牟田委員)

そうそう。「なるべきなんだよ」って、「頑張ってるね」っていうバルーンを打ち上げれば、それでいいんじゃないかな。

(山口知事)

ただ、もうずっとこれ言い続けてることなんですけど、画一的になる必要はなくて、むしろ「いいんだよ」って言ってあげて、100周年120周年行事はワンパターンで先生や副校長が司会をして、誰の挨拶の声で締めて、何かもうどこ行っても同じだから個性があってもいいはずなのに、ていうところをもっと開放してあげて、唯一無二と配った言葉は、もちろん強い言葉で言うと「俺たちでやるんだ」という言葉になるし、世界に一つだけの花にもなる。「みんな唯一無二の存在なんだよ」って、「だからいいんだよ」って、「認められるんだよ」って小林さんの的には、ただ、本当にもっと自由にいいはず。だから校則の問題もそうだし、学校の校風の問題もそうだけど、と言うようなバルーンを上げて決めるのは皆だよ。それはそれぞれ形があるわけですからいうんで、気持ちは一緒です。無理やりやっちゃいけない。

(落合教育長)

結構その型にはめるような学校に対する社会的な圧力が、ずっとあったのかなと思うんです。いろ

んな期待が学校にあって、ある意味過重な期待になってる。そういう中で、もっと自由にやっていいんだっていうのを、我々が発信していくことで変わってくるのかなと思うんですよね。

(小林副知事)

公立だと飛び出ちゃいけないっていうのは、何かやっぱりあるのかもしれないです。

(進政策部長)

都立高校は、だいぶ変わってきていて。昔はそういうので、ずっとみんな平等化しようっていうのが個性が無くなって、私学に負けまくって、ちょっと前からすごい改革してますよね。ただ、例えば日比谷だったら、「うちはまだ勉強でいきる」ってやってるし、留学生とかばかり集めてやってる学校もありますけど、あれを都の教育委員会が、多分認めてるんですよね。

(山口知事)

学ぶ意欲でいいよね。私が知事になって、20市町だって採用したりしなかったり、マルバツでまだら模様。それまでは全部マルにしてた県が指導し、全部バツにする。そうじゃなくて、最後どういう図柄にするかも含めて、もっと自由でいいんじゃないかな。画一じゃなくて。九州って土地はどちらかというとなんか画一を好む土地だったんで、行進を画一にしたりとか、昔から余り行進に点数つけるの好きじゃなくて、長崎で気づいて。高校総体の入場式で。

(進政策部長)

そうなんだ。知らなかった。

(牟田委員)

でもあれは面白かったから全国的になって。

(落合教育長)

うちは止めたそうです。

(青木副教育長)

ここ数年、開会式そのものが無くなってきている。

(山口知事)

もともと長崎で気づいて。それは画一に沿ったかどうか、もちろん少しずつ、もっとこう華やかにやったかとか、そもそも、入り口はそういう感じです。

(飯盛(裕)委員)

地域とつながる高校の魅力作りとあるんですけど、今までの話だと結構校長先生の責任というのが重要視、重そうな感じじゃないですか。もっともっと地域を巻き込んで、先日コミュニティースクール研究会に行ってきたんですけど、神奈川のある直近まで校長先生されていた方がいらっしゃって物凄くいい話をされていて、地域を巻き込んで学校運営委員会を作って、そこでずっと企業の社長さんだったりいろいろ入られて、学校をどういうふう運営していくかという中長期的に目標を決

めて経営され運営されてる。そういう体制が構築されると、それこそその学校の特色がもっともっと伸びるんじゃないかな。その校長先生が変わっても、やっぱりその運営委員会があるので、そこで中長期的なビジョンというのは変わらず続いていくんじゃないかなっていう、ちょっと先進そのもので研究大会に出て感じました。

(山口知事)

武雄高校なんかだいが武雄市とよく連携しながら、何か武雄市の学校ぽくなっていいよね。いつ行ってもいいと思う。県立高校だって市町と連携してやったらいいと思うし。

(落合教育長)

武雄市は武雄高校しかないというのがあるのかもしれないですね。連携しやすくして。

(山口知事)

伝統的で、色があるよね、武雄高校という。

(落合教育長)

意外とそういう少し田舎の学校が、佐賀市とか唐津市じゃなくて、そういう所がそういう連携が出てくるのかもしれないですね。

(山口知事)

市町に私たちもだいが GM21 とかで言ってるけどね。県立高校、大事にしてあげてって。一緒に自分たちのものとしてこう連携して。伊万里高校の時とか、伊万里市と連携していなかったのか。

(牟田委員)

今のは、私に聞かないで。

(落合教育長)

地元の役所との連携は、今まであまりなかったんじゃないですか。

(山口知事)

昔はなかったよね。昔は本当に私たちの時は、もう人が増えるほうだったから、大変だったからね。逆にね。

(飯盛(清)委員)

小学生中学生、地元からしか通って来てないからですね。高校はある程度広いところから集まってくるから、繋がりにくいというのがあったんじゃないのかな。

(牟田委員)

運営委員会っていうのは、いい発想だと思うんですけど。今学校に評議委員があるけれど、評議委員は何してるの。高校にあるよね。西高にも評議委員あるよね。

(青木副教育長)

学校の先生とかOBとかPTAの方とかに来ていただいて、評議委員会で年3回ぐらい会議をしてから学校の方針とか、今こういうことやってますっていうことを報告したりしてアドバイスを受けています。

(山口知事)

そこで決めてんじゃないの。

(落合委員)

そこは、決定機関じゃないです。アドバイザーリボードです。

(牟田委員)

さっき言った運営委員会みたいにすれば。

(飯盛(裕)委員)

私立は理事長がいますけど評議委員への聴聞ももちろんあるので重いです。

(牟田委員)

県立高校の評議委員は、重くないと思う。

(飯盛(裕)委員)

評議委員とは別だったと思います。学校運営委員会と評議委員会は、また別と書いてあったような気がします。

(山口知事)

それと別にね。

(小林委員)

コミュニティースクールを取り組んだ時に、運営委員会と評議委員会が別で。

(飯盛(清)委員)

ちょっと重くなる。ちょっとコミュニティースクールを並べていくと。最初打ち出した時には何かそこに人事権を与えるというような話もあったんですけどね。

(小林委員)

先日研修会での話でも、ただ会議をして意見を言うだけではなくて、実動部隊として地域の人と一緒に学校を作っていくと動く人たちが含まれる委員会にしないと、ただ話し合っただけでは、何も動かないかなと思います。

(落合教育長)

すごく形式的に作ってるところから、実動をしっかりと組み込んでやってもらってもいろんなパタ

ーンがあると思うんですけど、こないだ事例があったのが、その辺非常にしっかりやられてる。

(飯盛(裕)委員)

ただ言われてたのが、最初から完璧を目指してやってもうまく起動しないので、やれるところからそんなにハードルを高くしないで、出来るところから出来るだけ地域と協力してやっていくと、入りやすいですよ。

(小林副知事)

高校でもあるんですか。

(落合教育長)

今もあります。ありますけど、佐賀県内はコミュニティースクール、今はないですね。そこはちょっと促進していこうかなと。

(山口知事)

確かに都立って個性あるよね。

(進政策部長)

都立高校改革って、あの時打ち出したんですね。あれ、どこが指導とかって。

(山口知事)

都の教育委員会。

(進政策部長)

あれで危機感持って。

(落合教育長)

日比谷とか1回沈んで。

(進政策部長)

V字回復する前、沈んでる時に都立高校改革と打ち出して、各校みんな個性を持って打ち出していた。

(山口知事)

そう、そこには一つヒントがあるかな。

(牟田委員)

視察に行かなきゃね。

(飯盛(裕)委員)

千代田区立麹町中学校は有名ですよ。凄い行きたいなど。校長先生も退職されて。

(落合教育長)

その会議の午後に、島根県の隠岐島前高校の先生の話もあったんですけど、ああいう非常に、シビアな環境の中でもやれるんだと、我々もやれるんだと思いました。人口2,000人2,000何百人ぐらいの島で生徒数を増やしてるわけですよ。

(山口知事)

あれも先生が異動するけど、アドバイザーが入って最初ガンガンにやりたいけど、みんな異動で消えていって自分がだんだん存在感がでてきた。最初のうちはお前何じゃっていう。職員室になんてお前いるんだなんだけど、古いほうが教員って学校で強いんだよね。ずっといるとだんだん仕事がいやすくなった。島根県隠岐島前高校は、相変わらずちゃんと2クラス維持してるだろうか。

(落合教育長)

どうなったかな。

(山口知事)

廃校のやつ。だったら廃校廃止のエネルギーを自分たちのクラスの生徒たちに。今私たちがやっているような。そんな、統合するんだったら、生徒増やそうぜといっているようなもんで、1クラス2クラス。島の外からみんな寄宿するように。

(飯盛(裕)委員)

人口が少ない太良高校なんか、凄く特色ある高校じゃないんですか。ただ、ちょっと増えていっても電車の本数が減ると、それはそれで生徒もすごく影響が出てくるんじゃないのかなと。

(山口知事)

維持しなければならない。

(飯盛(裕)委員)

先の話ですけど。

(林政策総括監)

他に何かご意見ありますか。

(飯盛(裕)委員)

もう1個話が出ていたのが、IB(インターナショナルバカロレア)みたいなのを取り組む学校も県立高校で1校あったら面白いと思います。グローバル教育を沢山やっているのだから、県立の中にそういう学校を。

(山口知事)

致遠館高校どう。みんな英検準1級くらい取ってるの。

(落合教育長)

そうなりたい。ですから県立中は4校あるんですけど、その中では特に致遠館ですよ。その名前の由来から考えても、そうあってもいいんじゃないかなと。

(山口知事)

徹底的にやったらいいんじゃないかな。横浜国際みたいに。

(進政策部長)

あれぐらい、特徴もって。

(小林副知事)

そういう意味での特色ある教育は、多分教育委員会で機能を分担して、上からある程度決めてやるしかない。

(落合教育長)

そこは学校独自だけでは、出来ないんですね。応援してやる人が。

(小林副知事)

特別な人事も必要な。

(山口知事)

今は、そっちストレートにプレーヤーの方がいいかもね。

(飯盛(清)委員)

すいません。別の視点で1点だけ、長く続いてきた学歴社会というのがあって、今の保護者、今の中学生高校生の保護者の世代っていうのは、どれぐらいその感覚、学歴社会というのがもう崩れてしまっているんだろうかなっていう思いがあります。就職氷河期というものが20年くらい続いた中で、生徒や保護者の間に、進学校の下の方の成績で入るよりは、職業高校に進んで大学とか就職するというルートを選ぶ人が増えたように感じます。これは県教委が工夫して薦めてきたことだと思います。だから、今やろうとしているこの話で、やろうとしていたことをパッと出した時に、保護者の方々がどんな反応されるかなというのは、ちょっと興味があるかな。実態が分からないので、そんなことも今ちょっと思いました。

(山口知事)

工業とか商業の生徒の目が輝いてる。これはすごく大好き、本当にね。誇りもってちゃんとやって当たり前だけど、立派だから。

(小林副知事)

普通高校ですよ。今後むしろ個性が。

(山口知事)

普通高校きついよね。確かに今も、就職ってわかんない、流動化してて、どこ入ってもあれなんで、なので学歴社会やってる意味がないことを親がわかってくれないと。本当にその子にとって骨太に自分のために勉強するところっていうこと。

(落合教育長)

それで学校側はその偏差値の輪切りじゃなくて、その学校で「何をやりたいか」で入って来てもらいたいですね。

(進政策部長)

逆にそのためにも、学校も個性を持っててくれた方が、こいつのをやりたいなら「うちでって」言いやすいですね。

(小林副知事)

佐賀の場合、割とちょっと頑張れば通える。鳥栖から伊万里とかは厳しいと思うんですけど、頑張れば通えますよね。

(山口知事)

そっちに必ず今もう方向が流れているので、偏差値輪切りでどこ行けるからどこって全く無意味でナンセンスなんで、そこをどうやって県民に伝えていくのかって大事だよね。

(飯盛(清)委員)

何か今もう就職をしても、転職するのが普通な感覚ですね。そこら辺のことを、佐賀県の保護者の方々、あるいは佐賀県の小中高の先生方、なかなかこう学校と職場の行き来だけだと視野が、都会だとそうでもないような気がしながら、いろんな人も見るからですね。この辺も一つ壁としてあるのかなという気がします。

(山口知事)

今の子どもたち全然見てたら雰囲気違うし、今日、慶応の学生 250 名とリモートで交流したけど、全然考え方が私たちと違う。うちの子どもたちに、骨太になってもらえるように。

(落合教育長)

あの学校に行けば、これが出来る。勉強も部活もいいですけど打ち出して、あそこに行きたいなと思ってもらえるようなものを何か作り出していかないと。

(山口知事)

よその県からガンガン来るよ。この学校に行くのは俺だって。

(飯盛(裕)委員)

私、元々水泳してたんですけども、ライバルだった子が、今の商業高校の水泳部の先生で日本記録まで作って、北島康介選手の前の記録をもっていて、やっぱり彼をしたってきますよね。遠い所か

らも来るし、やっぱり商業もものすごく強くなっているし、国スポに向けて彼のために県の水泳連盟も動いていると思うし、やっぱりそういう特色ある先生は、その学校を代表するようなブランドじゃないですが、そういう先生たちは人事異動を少なめにしておいて、生徒たちを集めてそういうのを。

(小林副知事)

そういうのは動かさないで。

(落合教育長)

そうなった人が、いいことだとしないといけない。今どっちかと言うと、例外で仕方なくみたいな感じを抱いて。

(山口知事)

真っすぐでしょう。

(落合教育長)

素晴らしいことだと。

(山口知事)

ただ、問題はやっぱり逆にいい時は人事異動できるわけだから、そこをむしろ、こういい方に使った方がいいと思うんですよね。どう見たって、さっきの話じゃないけど、先生から見たってもうちょっとこう、テンパる事だってあるから、それはもういろいろ異動でやったらいいと思うし。逃げる場所が先生にもあった方がいいと思う。いい総合教育会議だね。

(林政策総括監)

他に言い残したことはありませんか。

(山口知事)

校則ってだいぶ変わったの。

(落合教育長)

今、校則の見直しを各学校で行っています。何で今の時期になるかという、例年、生徒手帳に反映させるのが、今の時期になってるんですよ。

(山口知事)

悪いやつとおかしいやつがいっぱいあるから、そこぐらいはまず変えないと。

(落合教育長)

県立が今見直してますので、楽しみにしてますけど、心配でもあります。マイナーチェンジでいってるんじゃないかなと思います。

(小林副知事)

全国ニュースにもなっていました。

(落合教育長)

弁護士会から提言されましたので。

(飯盛(裕)委員)

学校の校則がちまちま生徒手帳にやらずに、うちの校則はこれですと、WEB サイトにつけておけばいいと思うんですけど。

(林政策総括監)

これで今日のテーマは終わります。今日はありがとうございました。